

世界一気楽な国語の授業

神野麻郎

郊外というよりは田園に近い所に、江木伸夫と水絵は二人だけで暮らしている。小高い土地は見晴らしがよく、谷を隔てた向こうのなだらかな丘には一面にぶどう畑が広がっている。夕日はさらにその向こうの遠山に、このごろではよく空を茜色に燃やしながら沈む。

二人はゆっくり暮らしている。というより、かなり不活発だ。体力を維持するためにも、毎朝一時間余の散歩は欠かさないが、散歩から帰った後は菜園の世話に庭に下りるくらいで、どこへも出かけない日が多い。以前はたまに車で一泊、二泊の旅行をしたり、町で友人と会って食事を楽しんだりしたのだが、近年はそういう機会もめっきり減った。水絵が五、六年来の不治の病をかかえている。だんだん非力に、動きも緩慢になつてきた水絵を伸夫が支えて、今のところはまだ公的な支援には頼らず、日々の用や家事を二人でなんとかこなしている。その伸夫も年々体力の衰えを自覚し、近ごろは腰痛も起こつてきた。

そんなふうだから、あまり夫婦の家を訪ねてくる人もいないが、ただ、このごろ日曜日の午前中だけは決まった一人の小さな来客がある。近所に住む、小二になったばかりの本庄悠太で、やってくるのと伸夫は一時間ばかり、リビングのまん中に出した小テーブルを囲んで漢字と文章の読み方を悠太に教える。

江木夫婦が本庄母子と知り合つてからもう二年ほどになる。ある夕方、伸夫が近所の公園に飼犬のソングを連れていった時に二人と出会つた。そのとき意外だったのは、ふだん子供が苦手な老犬のソングが、悠太が差し込んだ手をなめ、頭をなでさせ、すぐになじんだことだ。美和にも同じような親しみを示した。それでたがいのうちとけたふんいきが生まれた。その後も何度か出会ううちに、二人が最近近くの団地に引越してきたことがわかり、引越しの事情などもなんとなく知れた。

ソングが喜ぶので二人はいっしょに散歩するようにもなり、伸夫の家にもやつてきて水絵にも会つた。水絵も、愛くるしい顔立ちで活発な悠太を孫のように気に入り、飾らない性格でがんばり屋の美和ともすぐに仲良くなった。美和は鍼灸師の資格をもち、町の鍼灸院に勤めている。水絵の体調を心配してくれ、忙しい日常なのにそのうちに休日などに悠太を連れてやつてきて鍼灸の施術をしてくれるようにもなった。やつてくると悠太はソングと遊んだり、伸夫を相手にボール投げをしたりした。一段落すると大人たちはリビングでゆっくりにお茶を飲んだ。去年の秋、ソングが死にゆく時には見舞つてくれ、死んだ日の夜にも二人そろつて訪ねてくれた。

その茶飲み話には子育てのことも出た。悠太はものおじしない、外遊びの好きな子で、小二になった今では団地の公園で友だちとサッカーに興じているし、週一回水泳教室にも通っている。運動系は何でも習得が早いのだが、でも肝心の勉強のほうで、と美和は母親らしく顔を曇らせた。

美和によれば、悠太は算数はまあふつうにできるのだが、なんといっても国語が苦手だ。漢字の読み書きができないし本読みも下手で意味もよく取れない、自分が見てやる暇もあまりないので自習させているが、時々チェックするとひどいありさま、ついつい感情的になって、「何べんもやったのになんでおぼえてないの!」、「また間違えた、もつとしっかり読みなさい!」などと叱ってしまう、すると悠太はますます勉強をいやがり、反抗もする、悪循環だ、母親が教えるのでは感情的になってダメですね、でも塾に通わせるにはまだ早いでしょ、どうしたらいいんですね、といった話だ。何度か聞いているうちに、伸夫が、では私が少し見てみましょうか、と申し出た。美和は申しわけないと恐縮したが、伸夫は、いや、暇ですから、気楽にやりますから、と少し押しした。伸夫は数年前まで短期大学で日本文学を教えていた。水絵も悠太が定期的にやってくるようになるのを喜んだ。ほんの二カ月ほど前からのことだ。もちろん報酬などは受けない。

今日はその日曜日で、十時ごろに悠太が、自宅から十分余りの坂道を、小柄な身体にリュックを背負って一人で歩いてきた。「よく来たねえ」と早速水絵がキッチンに導き、飲み物を勧め、好物のプリンを冷蔵庫から出してやる。つぶらな瞳の明るい顔が笑う。口をよく回る子で、食べながら訊かれたことを楽しげにしゃべっている。身体もよく動かす子で、食べ終わるとリュックに入れてきたけん玉を取り出して二人の前で得意げにやってみせた。タブレットで動画を見て新しい技を習得するのだという。運動系が好きなのはよいが、ちっともじっとしてられないといって、美和は発達障害を心配している。たしかにいつも身体を動かしている。それでも学校で授業時間の間はなんとか坐っていられるようだ。

「さあ、やろうか」、伸夫がリビングのまん中に折り畳み式の小テーブルを持ち出して鉛筆や紙もその上に置き、悠太を坐らせる。

「まず黙想」

座布団の上で悠太は身体を傾けながら、「こう?」と半跏趺坐を組む。背筋がおのずからに立った。先週教えた坐り方だ。目をつぶり、「吸ったー、吐いたー」と息を見ながらゆっくり十回深呼吸をする。

「吐く息のほうを長くするんだよ」

伸夫のほうで早く終わって悠太の顔を見ているとまもなく目が開き、笑った。

「よし、では集中。まず漢字だね」

悠太はうなずき、リュックからファイルにはさんだ紙を一枚取り出し、テーブルの上に置く。美和が自習させている漢字ドリルで、上段が漢字の読み十問、下段が漢字の書き取り十問になっている。そばからざっと見渡すと、空欄があるし、まちがいもちらほら目につく。

「悠くん、今日のは自信ある？」と伸夫が訊くと、

「ない。ママがぼろぼろやとってた」

伸夫が赤鉛筆で初めから順に、合っているものに丸をつけていく。三問目、「思いの外」の「外」の読みが「そと」になっていた。赤のチェックを入れてもう一度考えさせるが出てこない。「思いの外」とはちよつと古風な、今では大人でもあまり使わない言葉ではないか、小学二年生が知らないのも無理はないと思いつながら、「ほか」と教えると、

「あ、そうか。でも「ほか」は別の漢字が……」

「そう、これだね」と「他」と余白に書いてやる。

「そうそう」

「この字も「ほか」、「ほかの人」なんていうばあいを使うね。でもこっちの字にも「ほか」という読みがあるよ。「思いの外」というのは、思っていたよりも、という意味、「意外にも」という言い方も同じようだね。そう、……たとえばね、悠くんが体力テストの五〇メートル走の時、走る前は今日は疲れているからあまり速く走れないなと思っていたのに、走ってみたらまあ速かった、そういう時「思いの外、速く走れた」というふうを使うね」

いちおう腑に落ちたのか悠太はうなずき、

「悠太は走り、いつでも速いよ。この間、五〇メートル走で九秒三だったんだよ」

「そうか。それは速いなあ。じゃあ、クラスで一番？」

「うん。一番速かった。もう一人同じ九秒三の子がいたけど」

「そうか。すごいねえ。では五回」

「思いの外」を悠太は五回発声する。

後はしばらく〇が続く。ちよつと難しそうな読みが正解の時には「おう、よくできてる」とほめてやる。終わりのほうで二問まちがいがあった。同じように読みと意味を例をあげながら説明し、五回くり返させる。

一見した時よりも、まあできている。でもこのドリルの内容を悠太は初めて習うのではないのだ。美和によれば、もう五回も六回もくり返しやっている。それでも頭に定着せず、忘れてしまっている読みや漢字が多いのだ。それで美和はどうしても悠太に厳しい言葉を投げつけてしまう。

伸夫先生はけっして叱らない。できなくても、坐りながら落ち着かずくねくねもぞもぞしていても、気をそらしてあらぬことをしゃべりだしても叱らないし、注意もしない。この勉強の目的はただ一つ、この子が漢字を、国語を少しでもおもしろいと思えるように仕向けていくこと。国語の勉強自体に興味を持てば、あとは自分で、また人に教えられながら勝手に

進んでいくだろう。受信のアンテナを立てる、その手助けをちょっとするようなものだ、と思っている。

それに、じっさい伸夫は腹も立たないのだ。わが子でないので距離を置けるからそうなのかとも思うが、たとえ悠太がわが子であっても今ならきつと叱らないだろうと伸夫は想像する。そのわけはきつと、一言でいえば自分の老いにある。近年は身の回りに生起することもに対しても、メディアから入ってくる世の中の動きに対しても、どうでもよい、どうにかなる、いや、どうにもならない、などと思うことが多い。それは高尚な悟りや諦念の境地というより、単純に老いたゆえの思考や感情の動かなさ、そして無力感だ。それには、もう自分は世の中というゲームからはすっかり下りてしまったという感覚がともなう。

それでいて、しかし、人生について老人らしい一言言めいた感想もないではない。それをあえて前向きにいうなら、人間はあまり無理などせず、生涯をかけてその人間らしい人間になればよい、といったようなことだ。そうした思いを少年の上に引き写せば、悠太は今、水中を泳ぐ魚があたりの水と親和しているように、身体を動かすことであたりの世界と親和し、楽しんでいる。これからも若い間はそうだろう。悠太はそうして人生を楽しめばよい、と思っている。

まちがった箇所をもう一度声で読ませ、次にプリントの下の書き取りの段に入ろうとした時、悠太がふと、

「おじさんは、国語の先生だったの？」と見上げる。

「そうだよ」

「小学生に教えたことある？」

「そうだね。あるよ。昔、何人か」

思い起こせば学生時代に家庭教師のアルバイトで何人か教えた。大学院生時代には二つ、三つの塾でも教えた。その塾の一つの場面が、甘辛いような感情をともしないながら記憶の底から立ち上がってきそうになったが、すぐに消えた。

「漢字の書き取りは、「こんしゅう」が「今周」に、「帰る」の送り仮名が「える」になっていた。また「とうきょう」が空白だった。本棚から地図帳を出してきて見せ、「東京」はひがしのみやこなんだと教える。

「みやこ、って何？」

「王様のいる所を昔はみやこって言ってたよ。今は政治の中心地をいうよ」

ついでに「京都」や「北京」についても話してやる。

間違えた字を、「よく見つめながら書くんだよ」といって三回ずつ白紙に書かせる。

プリントを終えると次は本読みだ。悠太がリュックから「科学のふしぎ」というタイトルの本を取り出す。美和が買い与えたもので、小学二年生向け、もう一回は美和といっしょに通して読んだという。

一つの文章がイラストも少し入って三ページか四ページの分量。まず悠太が、自分の好きなものを選ぶ。目次をながめて、「これにする」。「月はどうして地球の周りをまわっているの？」。

初めは黙読させる。声を出して読むことも大事だが、もっと大事なのは何が書いてあるのかわかること、つまり意味を読み取ることだよ、と何度か言い聞かせてある。伸夫もそばから文字を拾う。横手から見るので少し遅くなり、悠太のほうが早いこともある。

「もう読んだ？」

「んん、いいよ」

悠太がページをめくり、二人ともまた目を落とす。

「終わった」

「そう。じゃあ、書いてあったことについて訊くよ」といって、伸夫は思いつくままに三つ四つ、部分についての質問をする。記憶を問うのでなく、テキストを見て答えていいから、といつてやる。質問ごとに、悠太の視線がページの上をあちこちさまよい、答えが書いてある箇所はどうやらたどり着く。なんとかだいたいの答えをまとめる。

「月ってどれくらい大きいの？」

文章の中身に興味をもつのはとてもよいことだ。伸夫は立ち上がり、テニスボールを持ってきて、

「直径、つてわかる？ これが月だとすると、この幅、こっちの端からこっちの端までの長さだね。月の直径は約三五〇〇キロメートル、地球の四分の一の長さだよ。地球のほうがいいぶん大きいね」

「うわ、じゃあ地球はビーチボールくらい？ 大きい」

「重力って、出てきたね。ものを引きつける力、と書いてあった。目に見えない力だけだね。大きいものは大きな重力を持つてるんだよ。だから地球が月を重力で引きつけるから、月はどこかに飛んで行ってしまわないで地球の周りをぐるぐるぐるぐる回り続けてるんだよ。ボールに紐をつけてぐるぐる振り回すみたいだね。……じゃあ、この文章を初めから音読しよう。音読する時も意味を頭に入れていくんだよ」

悠太が一段高い声で読みはじめる。でも時々助詞や助動詞を飛ばしてしまったりいいかげんに読んだりしてしまう。また行替わりのとき一行飛ばして読んでもうこともある。そのたびに伸夫は短い言葉で促して読み直させる。一行飛ばしたり、同じ行を二度読んだりする学習障害があって、悠太もその障害のグレーゾーンにいるかもしれないと美和は心配している。「読字障害」という言葉は伸夫も知ってはいるが、悠太のは障害とまでは思えない。

ややたどたどしい悠太の声を聞きながら、「読む」というのはいったいどういうことなんだ？ と伸夫はかえって自分に問題を突きつけられたような気になる。長年教壇に立ちながら、うかつにもこの国語の基本中の基本の問題には面と向き合っただけだったような気が

がする。思えば、文字を「読む」も文字を「書く」も、人類史の途方もない長さからいえば人類がほんのこの間習得したばかりの、複雑で特殊な、きつと非常に風変わりな技術なのだ。この「文明社会」では、その習得と修練を、大人たちは「教育」と称して世の中の年端もいれない子供たち全員に強いていることになる……。といった大問題は今は措くとしても、「文字を読む」という、これから何万年か経っても他の動物たちは決してやらないだろう特殊な作業を、人間の大人はふつうどういいう過程をたどってやっているんだらう、と伸夫は悠太が読み進んでいる箇所をあらためて目でたどってみる。そして一つ気づいたことがあった。それは単純な、いわば技術的なことなのだが。

二つ目の文章は伸夫が選ぶ。本をばらばらとめくって、「雷はどうして光ってゴロゴロ鳴るの?」という題の文章を選んだ。悠太も、うん、知りたいと興味を示した。まず黙読する。積乱雲ができる途中の氷の粒がぶつかり擦れ合って音を立てる、また電気が発生してそれが集まるとイナヅマになって地上に落ちるなどと、わかりやすい比喻も使いながら説明してある。今度も悠太のほうが多く早く読み終わった。

「わかった?」

「うん、わかった」

またいくつか文章の内容について伸夫が質問する。雷の話題で、

「雷に当たったら、死ぬの?」と悠太。

「そう、死ぬことがあるよ」

それを聞いていた水絵がキッチンからわざわざ立ってきて、

「この間もニュースでいったわねえ。どこかの中学生がクラブ活動中に学校の運動場で雷に打たれて、かわいそうに亡くなったんだって。ゴロゴロ、とちよつと遠くで鳴ったと思ったら、すぐにイナヅマが落ちてきたんだって。怖いねえ。悠くんも、公園で遊んでるとき、雷鳴ったらすぐお家に帰りね」

「逃げるん?」

「そう、ゴロゴロってきたら、お家か近くの建物の中に逃げ込むのがいいのよ」

伸夫が、ちよつと咳ばらいをして、

「じゃあね、今度はおじさんがまず音読してみるよ。聞いててね」といって、題から読みはじめた。意識してだいぶゆつくり読む。悠太は聞きながら目で文字を追う。読み終わった。

「じゃあ、こんどは悠くん」

「うん」と悠太が始める。伸夫をまねていつもよりゆつくり読んでいる。さつきより安定している。そしてほとんど間違えたりつまったりせず、最後まで読み終えた。

「悠くん、よく読めたねえ」

水絵も、

「じょうず、ほんとにじょうず」とキッチンで手を叩く。

悠太も嬉しい顔をする。

「おじちゃんがゆっくり読んだから、ぼくもゆっくり読んだ」

「そうか、そうだよ。ゆっくり読めばいいんだよ」

「ゆっくり読んだら、先のほうが見えるから、読みやすい」

「そうだ悠くん、そのとおりだよ。ゆっくり読むと読みながら先の文字が目に入ってくるね。だからうまく読める。そこが大事なんだよ。おじさんも今、それを悠くんにおうと思ってたんだ。自分で気づいたのはえらい！そこが大事だよ。これからもそうやって読んでみなさい」

うなずきながら日焼けした悠太の顔がますますほころんだ。

いつもは二つだけで終わるのだが、

「よし、今日はまだ時間があるから、も一つ読んでみよう。いいね。じゃあ、これにしよう」

タイトルは、「ウンチはどうして茶色いの？」

悠太も笑って、「読も読も」。

まず黙読。口から食べ物が入って尻から出るまで、各消化器官のはたらきをわかりやすいイラストを使って説明してある。その消化器官は一直線に伸ばすと子供のも七メートルもあるそうだ。伸夫も忘れていた知識を取り戻した気になる。身体の中を通る食物の旅はけっこう山越え谷越え、悠遠なのだ。

黙読が終わって伸夫が内容について質問する。

「じゃあ、どうしてウンチは茶色いのかな」

「えっと」と悠太は伸夫を見て、

「自分の言葉でいい？」

「ああ、いいよ」

「身体の中を通ってくる途中で色がつくから」

「うん、そうだね。それをもうちょっと詳しくいうと？ 文章を見て答えていいんだよ」

「えっと」と一ページ目と二ページ目のあたりに目を這わせている。説明の文があるのは三ページ目だ。

「もう少し後のほう」

ページをめくって、

「あ、ここ。「小腸で消化する時に胆汁という茶色い液が出ます。だからウンチは茶色いのです」。つまり、胆汁という茶色い液が出るから」

「そうそう、その通り。……食べ物を通る道が七メートルもあるのはすごいねえ。ここからおばちゃんまでの長さよりも長いよ。悠くんの身体の中にも七メートルの食べ物の道があるんだよ」

「大人だったら？」

「十メートル以上あるかなあ」

さあ音読、となつて、コツをつかんだように今度も悠太はゆっくり上手に読んだ。

それで約一時間の勉強が終わった。

伸夫は、長かった教員生活の最後に七歳の少年を生徒にもつたこの授業を、「世界一気楽な国語の授業」だと思ひ、水絵や美和にもそう話している。引き算をしてあらためて驚くのだが、自分と悠太とは六十五も歳が離れている。主に前世紀を生きて消えゆくこうとしている人間と今世紀に生まれてこれから長く生きようとしている人間が、たまたまこの世界で小さなテーブルを囲んで同じ国語の勉強に向き合うのは、案外稀有なことといつていいのではないだろうか。少なくとも自分にとつてはそうだ。いつまで続くのかわからないこの授業が、少年の学力向上に資することはたぶんあまりない。ただ、今日のような発見がいくつあれば少年にも楽しいだろう。今日はまあうまくいったほうだ。

「おそば作ったから、悠くん食べていきなさいね。ママには電話しといたから大丈夫よ」悠太がざるそばが好きなのを水絵は知っていて、この間スーパーへ買い出しに行つた時間もそばの束を買いこんでいた。うすく油のにおいがしているので、朝、庭でとつた野菜の天ぷらもつくのだろう。

昼食までにはまだ少し間があるようだ。悠太はテーブルの脚をたたみ、勝手を知つたふうに部屋の隅に運んで立てかけた。てきぱき本をリュックにしまいこむと、代わりにそこから黒い少年用のグローブを取り出し、伸夫に、「キャッチボールしよ」という。鎖から解き放たれたように身体がもう躍動している。勉強よりもじつはこれが楽しみなのだという気持ちで正直に顔に出ている。

伸夫も柵から繕いの痕もある古いグローブと軟球を取り出し、二人は庭に出た。七、八メートルほど隔ててキャッチボールを始める。去年このキャッチボールを始めたころは、そばでソングが寝そべって放物線を描く白いボールの行方を見上げていたものだ。

小二の初めだから軟球を使うのはまだ早いかもしれないが、運動神経のよい悠太は難なく使いこなす。もうテニスボールなどでは満足しない。キャッチボールは伸夫が悠太に教えた。大昔、中学で野球部だった伸夫が捕球や投球の基本動作を教えると、悠太はすぐに習得した。楽しそうに続けるので、悠太の誕生日にその新品の本皮のグローブをプレゼントした。

伸夫の投げた球が悠太の頭を越して、隅のほうの柿の木の下まで転がったとき、

「思ひの外、大きかったねえ」といつてやった。

次にはいつぱいに手を伸ばして球をキャッチできた。

「思ひの外、とれた」と笑顔の悠太から返ってきた。

悠太が「ピッチャーする」というので、伸夫はそこらに落ちていた棒で土の上にホームベースを描き、その後ろに坐つて構えた。腰痛を気にして立ち居はゆっくりだ。しばらく二人の間で、ストライク、ボール、球種の名前などが飛び交った。美和によれば、このごろ悠太

は公園でお兄ちゃんたちに影響されて野球にもこつている。なにかにこりだすとなかなか徹底していて、ネットの動画を熱心に見るので、球種やボールの握り方についてはもう仲夫よりもずっと詳しくなっている。今もストレートやカーブやシュートばかりでなくスプリットやナツクルなども試している。そして小さな手なのに、たしかにボールがそのように曲がるのだ。「よしいツイーシューム！」などと声をかけてやると顔が誇らしげにほころぶ。

「用意できたよ」と家の中から水絵が呼ぶ。二人は中に入って手を洗い、キッチンのテーブルを囲んだ。食事の間、夫婦が話しかけ、悠太が答える。悠太が何かいい、夫婦が笑う。ママにはだいたい反抗するらしいが、この家ではとてもしおらしい。

食べ終わると仲夫が流しに洗い物に立った。ちやうどママから電話があり、そろそろ帰ってくるよう促された。スマホを渡された悠太は、

「うん。今日は思いの外、よく読めたよ」と伝えていた。

「ありがとうございますー」と大声でいつてリュックを背負い帰っていく悠太を、夫婦は門扉の外まで出て並んで見送った。水絵が持たせた野菜を少し入れたビニール袋も提げているが、小づくりの身体が、スキップを踏むように軽やかな足取りだ。一度振り返り手を振って、曲がり角に消えた。夫婦が家の中に入ると、小さな祭りが終わったように後には静寂だけが残っていた。

疲れが出たようで、水絵はすぐ寝室に入った。

夕食の前に、キッチンに立った水絵にいわれて仲夫は菜園に葉物をとりに出た。昼間はあまり感じなかったのに、蜜柑の白い花が甘くにおい、木の周りでまだハチの羽音がする。葉をいくつか摘まんで籠に入れ、ゆっくり腰を立てて見上げるとちやうど雲を染めて山ぎわに夕日が落ちていくところだった。谷向かいのぶどう畑にも茜色の霧がかかっている。見がいがあり、仲夫は壁の脇に置いてある椅子に腰かけて移りゆく景色を眺めた。そのうちにふと、午前中におじさんは小学生に教えたことがあるか、と悠太に訊かれたことを思い出した。あるよ、と答えて、ある連想がちよつと動いたのだった。その連想、古い記憶を、仲夫は今、色づいた淡い光の中に呼び戻してみた。

蛍光灯のともった塾の教室の前のほうに仲良く並んで坐っている小学五年生の女の子二人。今までも時おり思い返してきたからだろう、二人の苗字は今でも憶えているし、面影も浮かぶ。自分が大学院生の時だ。

勤めていた予備校の校長とささいなことから喧嘩をしてやめてしまい、次のアルバイトをする必要があつて通りがかりに飛び込んで雇ってもらった小さな塾だった。何かの事情で学校教師をやめた中年の男が一人でやっていた。二、三のクラスを受け持ったが、その二人の女の子のいるクラスがいちばんやりやすかった。生徒はわずか五、六人。女の子たちは反応もよく、笑顔で授業を聞いてくれ、授業の前後では雑談もはずんだ。どういう成り行きだったのか、二人と一時間ほど塾の近くの公園で遊んだこともある。後年就職した短大でも

長年教壇に立ったわけだが、それを勘定に入れても、あれは、「世界一気楽」ではないが、自分の経験の中で「最も親和的で楽しい国語の授業」だったかもしれない、と伸夫は今思う。引越しをするからという自分の勝手な都合で、その塾の講師は一年足らずでやめてしまった。クラスでそれを告げたとき、二人の女の子は急ににぶい、とまどったような表情になった。伸夫はその気持ちをわかりつつ、こんなことはよくあることだからと自分にいい聞かせてあっさり別れた。しかし後になって、少女たちのやわらかな心を無情に傷つけたのではないかとだんだん痛みがつのってきた。もっと思いやりのあるいいようも、別れようもあつただろうに。数カ月後に一度塾に立ち寄ってみると、塾長から、あの二人はもういない、辞めたよと告げられた。だから親和的な感情には苦い悔恨も混じっている。あれから四十数年も経つわけだからあの二人ももうずいぶんいい齢の大人になっているわけだが、どこでどんな人生を送っているのか。二人のほうは、小学生の時の短期間の塾の講師との交わりなど、とうに忘れたにちがいないが。

苦い悔恨の思い出は、その後の長い教員生活でのあれこれの失敗や後悔を数珠つなぎに呼び出してきそうだった。退職して暇になった日常では、おのずと過去の自分のふるまいがよく思い出される。それももうまくいったことよりもいかなかったことのほうが多く出てきて、今さらながらに責め立てられたりする。そのもう取り返しつかないどうしようもなき、じりじりとする感じは、夜の夢にも変容して出てくるようで、チャイムが鳴ったのになかなか講義室にたどりつけなかったり、教壇の前には立ったが、何も準備していないので学生たちを前に何をしゃべっていいのかわからず焦ったりする、といった類いの夢をくり返している。昨夜も、たしか、そんな夢を見た。

そばで、

「できたわよ。どうしたの？」という声があった。

「ああ、夕日がね。今日はきれいだった」

水絵ももう一脚の椅子に坐って西空を眺める姿勢になった。夕日の荘厳はもう終わりか、で、山ぎわには置き忘れられたように灰色の雲のたなびきが残っている。

テーブルに向かい合っての静かな食事の時、

「悠くん、今日はほんとに上手に読んだね」といって水絵が、病のせいでやや表情の乏しくなってきた顔に笑みを浮かべた。

「そう、上手だった。コツをつかみかけたかな。自転車の練習をしていて、ある日ふとコツをつかんだら乗れるようになるだろ。読むということにもそんなコツがあるのかもしれないよ」

「かもしれないなんて、先生だったくせに、あやふやなんだね。……かわいい子だね、悠くんは」

「ああ、とてもいい子だよ」

「将来、どんな大人になるのかなあ。自分に合ったいい仕事を探せるかなあ」

「だいじょうぶだよ。あの素直さと愛嬌があれば、どこでもやっていけるよ」

「愛嬌？ 愛嬌がそんなに大事？」

「たぶんね。人へのサービス精神だから。まわりの人に愛されるよ。ボクなんかそれがなかったから、人生でだいぶ損をしてきたね」

「そんなものかなあ」

「そんなものだよ」

沈黙の後、

「あそこは、どうしようか？」と伸夫が訊いた。水絵は少し首を傾げた。

夫婦は先月、自宅から車で二十分ばかりの所にある老人ホームを見学してきたのだった。水絵の古い年上の友人がそこで暮らしており、入居を勧めてきた。そこは景色がよく、医療施設も併設されている。建物の外観はきれいで部屋の中も設備が整っていた。これといった持病もない、仕事を勤め上げ、独身を通してきたその快活な八十歳の友人は、「快適よ」といった。経済的にも、水絵一人分くらいなら何とか賄えそうではある。水絵がそこに入り、伸夫が家に残って週一、二回そこに訪ねていく、あるいは水絵が帰ってくる、といった生活のかたちを夫婦は考えてみたのだ。しかし、夫婦はためらった。二人で話し込んでその施設、その土地に身を置く、離れて暮らすという想像がいくらか現実味を帯びてくると、やはりそばから感情がにじみ出た。入居待ちの人たちがいるということで、エントリーだけはしておいてもよかったが、それをどうするか、と伸夫は訊いたのだ。

「もう少しここにいたいわ」と水絵はいった。

ガラス戸の向こうに青い闇が暮れなずんでいる。